

# 仏頂尊勝陀羅尼の研究

——特に仏陀波利の取経伝説を中心として——

佐々木大樹

## 1 はじめに

仏頂尊は、仏の身体的特徴である三十二相の随一「頂上肉髻相」を人格的に表現したものである。近年、筆者は仏頂尊研究の端緒として「仏頂尊勝陀羅尼」（以下、尊勝陀羅尼）を選び、文献学・歴史学両面から検討を重ね、その成果を発表してきた。

- 1, 「仏頂尊勝陀羅尼の研究—漢訳諸本の成立をめぐる—」  
（『韓国仏教学 SEMINOR』第10巻：2005年12月）
- 2, 「尊勝陀羅尼成立考」  
（『真言密教と日本文化』：2007年12月）
- 3, 「『仏頂尊勝陀羅尼経』の研究—尊勝陀羅尼系資料の関係性を考察する—」  
（『密教理趣の宇宙』：2007年3月）
- 4, 「尊勝陀羅尼分類考」  
（『総合佛教研究所年報』第29巻：2007年3月）
- 5, 「仏頂尊勝陀羅尼経幢の研究」  
（『智山学報』第58輯：2008年3月）

そして、以上の五つの小考を集約する形で、『仏頂尊勝陀羅尼の研究』と題する学位論文を大正大学に提出した。当論考では、紙数の都合上、学位論文の第3章で取り上げた仏陀波利（Buddha-pāli：覺護：7世紀後半）について論じたい。この仏陀波利とは、尊勝陀羅尼の梵本を中国にはじめて将来した僧であり、自らも『仏頂尊勝陀羅尼経』（大正蔵No.967）を翻訳している。

筆者は、尊勝陀羅尼の中国受容の問題を考える上で、重要な役割を果たしたのは、場所ならば五臺山、人ならば不空および仏陀波利であると考えている。

とりわけ仏陀波利の影響は大きく、敦煌で蒐集された尊勝陀羅尼の多くには、「仏陀波利」の名が付けられている<sup>1)</sup>。また中国全土で、尊勝陀羅尼経幢が盛んに建立されたが、その石刻には仏陀波利訳本の使用が多数を占めている。武徹述『加句靈驗仏頂尊勝陀羅尼記』（大正蔵No.974C）でも、仏陀波利訳本が天下の幡刹（＝経幢）に用いられ、読誦されていることが記される<sup>2)</sup>。

仏陀波利の人間像・功績は、1300年という時の中で、様々に潤色されたのであり、その実像を把握するのは難しい。かかる事情から、当論では仏陀波利の尊勝陀羅尼将来の記録を「取経伝説」と総称し、信仰の中に息づく「仏陀波利」の人間像を探ることとしたい。

以下、仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼経』（大正蔵No.967）に付された志静撰の経序（以下、志静序）を引

用しながら、当伝説が後代いかに変容したのか、またその矛盾点・問題点について整理したいと思う。

## 2 資 料

仏陀波利の取経伝説は、以下の 13 種類の資料に収録されている。

- 〔1〕 志 静 撰『仏頂尊勝陀羅尼経序』（撰述年不詳：大正蔵No. 967）
- 〔2〕 智 昇 編『開元釈教録』（730 年編纂：大正蔵No. 2154）
- 〔3〕 智 昇 編『続古今訳経図記』（730 年編纂：大正蔵No. 2152）
- 〔4〕 円 照 編『貞元新定釈教目録』（800 年編纂：大正蔵No. 2157）
- 〔5〕 法 崇 撰『仏頂尊勝陀羅尼経教跡義記』（800 年頃撰述：大正蔵No. 1803）
- 〔6〕 武 徹 記『仏尊勝陀羅尼記』（823 ～年編纂か：大正蔵No. 974C）
- 〔7〕 賛 寧 撰『宋高僧伝』（988 年編纂：大正蔵No. 2061）
- 〔8〕 延 一 撰『広清涼伝』（～ 1060 年<sup>3)</sup> 編纂：大正蔵No. 2099）
- 〔9〕 鄰 濟 川 撰『広清涼伝序』（1060 年撰述：大正蔵No. 2099）
- 〔10〕 覚 岸 撰『釈氏稽古略』（1354 年編纂：大正蔵No. 2037）
- 〔11〕 『清涼山志』（1701 年編纂：『中國佛寺志』 第 29 卷所収）
- 〔12〕 『清涼山新志』（1701 年編纂：『中國佛寺志』 第 29 卷所収）
- 〔13〕 紀 昉 撰『欽定清涼山志』（1781 年編纂：『統修四庫全書』 所収）

仏陀波利の取経伝説を記載する資料は、以上のように数多いが、その大本となったのは〔1〕志静序の記事であって、資料間で重複する記述も多い。このような事情から、〔1〕〔2〕〔5〕〔7〕〔8〕を中心に、取経伝説を 10 の場面に分けて対照することとしたい。

また直接、仏陀波利の取経伝説に触れるわけではないが、以下の資料も参照した。

- 彦 悰 撰『仏頂最勝陀羅尼経序』（680 年頃か：大正蔵No. 969）
- 慧 祥 撰『古清涼伝』（7 世紀撰述：大正蔵No. 2098）
- 円 仁 撰『入唐求法巡礼行記』（847 年編纂：『大日本仏教全書』 第 113 卷）

### 3.1 仏陀波利の出自

**佛頂尊勝陀羅尼經者。婆羅門僧佛陀波利。**

〔1〕では、仏陀波利がバラモン僧（Brāhmaṇa）であることを記し、他資料では、〔5〕バラモン、〔2〕沙門（Śramaṇa）、〔7〕釈種としている。仏陀波利を意識した名については、〔2〕〔5〕は覺護とするが、唯一〔8〕のみ覺愛とする。

〔1〕では言及しないが、他資料では、等しく仏陀波利の出身地について、北インドの罽賓国（Kashmir）としている。すなわち、インド大陸の北西部、ヒマラヤ山脈西部からカラコルム山脈南部までの地域を指す。〔5〕では西南国とも言い換えているが、これは中国から見た場合の呼称と理解される。

### 3.2 仏陀波利と五臺山の出会い

〔1〕には記述がないが、他の多くの資料で、仏陀波利が渡申した理由を明かしている。すなわち、仏陀波利が様々な霊跡をめぐる中で、「文殊菩薩が五臺山にいる」との情報を得たとしている。

唯一、〔5〕では、仏陀波利が様々な図書経論を渉覧した末、「五臺山で文殊が諸菩薩のために『華嚴經』を説いている」との情報に行き着いたとしている。

五臺山文殊の典拠として、古来、二つの経典が指摘されてきた。仏駄跋陀羅訳『大方広仏華嚴經』（大正蔵No.278）「菩薩住处品第二十七」では、清涼山で文殊が、一万菩薩とともに常に説法すると記されている<sup>4)</sup>。7世紀、慧祥撰『古清涼伝』でも、この一文を引き、僧俗を問わず多くの者が、文殊に面接せんと五臺山に來訪したことが述べられている。

さらに、菩提流支訳『文殊師利宝蔵陀羅尼經』（大正蔵No.1185B）では、大振那の五頂と呼ばれる山に文殊が居住すると記されている<sup>5)</sup>。振那とは中国、五頂は五臺山の異称の一つである。作爲的な記事であり、後世挿入された一文とも指摘されるが、『華嚴經』とともに、後世に与えた影響は大きいものと考えられる。

〔8〕では、多くのインド僧が五臺山を訪れたことが述べられており、中国五臺山を文殊の聖地とする理解は、広くアジア全域に伝わっていたものと推測される<sup>6)</sup>。仏陀波利もまた五臺山文殊の話聞きつけ、遠路來訪した外人僧の一人と考えることができる。

### 3.3 五臺山に到る仏陀波利

儀鳳元年從西國來至此漢土到五臺山次。

仏陀波利が、北インドを出発した年次は不明であるが、中国五臺山への到着は、儀鳳元年（676）としている。その時の五臺山の様子は、〔5〕に詳しく、雲霧が立ち込め、去來の道もわからなくなる程であったという。

その五臺山中の到達地点について、〔5〕では、山下から「数十余里<sup>7)</sup>」に位置する「高山」とし、〔8〕ではより具体的に、五臺山の南に位置する「思陽嶺」としている。この二つの記事が、同一の場所を指すものかは不明である。

『入唐求法巡礼行記』によれば、「思陽嶺」とは、仏光寺から西南におよそ十四里のところに位置する場所であり<sup>8)</sup>、「波利遇老人」と題する尊勝陀羅尼經幢（宝幢）が建立されているという。

〔1〕志静序が撰述された当初、仏陀波利と文殊の出会いの地は、特定されていなかったものと思われる。それが、五臺山信仰の展開とともに、仏陀波利の伝説が巷間に広まりゆく中で、信仰の対象として具体的聖地が希求されていったものと推測される。

### 3.4 仏陀波利と老人の出会い

遂五體投地向山頂禮曰。如來滅後衆聖潛靈。唯有大士文殊師利。於此山中汲引蒼生教諸菩薩。波利所恨生逢八難不覩聖容。遠涉流沙故來敬謁。伏乞大慈大悲普覆令見尊儀。言已悲泣兩淚向山頂禮。禮已舉首忽見一老人從山中出來。遂作婆羅門語謂僧曰。

五臺山上（思陽嶺）に到着した仏陀波利は、山に向かって五体投地をして、「如来滅後、ただ文殊のみは、この五臺山上に隠れて衆生を導き、諸菩薩を教化している。波利が恨めしく思うのは、八難によって文殊の聖容を見られないことである。遠く沙漠を涉って来たのは、文殊に敬謁せんがためである。伏して願わくば、大慈大悲をもって、その尊儀を見せしめんことを」と述べ、悲泣雨涙して頂礼するのである。そして、仏陀波利が頂礼の後に顔を挙げると、一老人が、婆羅門語をもって語りかけてきたという。

この箇所の問題なのは、仏陀波利の面前に現れた老人が何者かということである。諸資料において明言されないが、文脈的には、この老人が文殊の使者であることを想像させる内容となっている。

当時、五臺山の文殊は、種々に変化するものと信じられてきた。『古清涼伝』『広清涼伝』に収録される種々の靈驗譚において、文殊は僧形や女人、また老人の姿となって巡礼者の前に登場するのである。例えば、牛雲・無著・道義等の僧侶は、文殊と思しき老人・老僧と出会っており、仏陀波利の話も同様に解釈されうるのである。

『入唐求法巡礼行記』第3巻では、この老人を明確に文殊と述べており<sup>9)</sup>、9世紀前頃には、すでに「老人≡文殊」とする解釈は広まっていたものと考えられる。敦煌莫高窟の第61窟（文殊堂）西壁面、五代の時代（907～960年）に描写された「五臺山図」中でも、この老人を文殊の化身と明記している<sup>10)</sup>。

### 3.5 老人から仏陀波利への聖嘱

法師情存慕道追訪聖蹤。不憚劬勞遠尋遺迹。然漢地衆生多造罪業。出家之輩亦多犯戒律。唯有佛頂尊勝陀羅尼經。能滅衆生一切惡業。未知法師頗將此經來不。僧報言曰貧道直來禮謁不將經來。老人言既不將經來空來何益。縱見文殊亦何得識。師可却向西國取此經將來流傳漢土。即是遍奉衆聖廣利群生。拯濟幽冥報諸佛恩也。師取經來至此。弟子當示師文殊師利菩薩所在。

老人は、漢地の衆生が多く罪業を造り、また出家の輩ですら多く破戒をしているとの現状を述べ、これらの罪業を除くため、『仏頂尊勝陀羅尼經』の将来を仏陀波利に問うのである。その上で、この經典を將來しなければ、文殊の聖容を拝しても無益であり、インドからこの經典を伝えよとの聖嘱を、仏陀波利に授けるのである。そして、その将来の暁には、弟子が文殊の所在を教示しようとの約束をするのである。

### 3.6 渡印する仏陀波利

僧聞此語不勝喜躍。遂裁抑悲涙至心敬禮。舉頭之頃忽不見老人。其僧驚愕倍更虔心。繫念傾誠迴還西國。取佛頂尊勝陀羅尼經。

老人の言葉を聞いた仏陀波利は、喜躍悲涙し、一心に山に向かい敬礼する。礼を終え、仏陀波利が頭を挙げた時には、老人の姿はすでになく、驚愕して更に敬虔な気持ちになったという。この老人の聖嘱に従い、仏陀波利は再び西行して、『仏頂尊勝陀羅尼經』の梵本を將來したのである。

その行先については、「本國」あるいは「西國」「西域」と記すのみであり、必ずしも明確ではない。仏陀波利の旅程は、〔5〕に詳しく「屢、寒暑移ろい、周遊すること九万里、來去すること十餘年なり」と述べている。しかし、仏陀波利が五臺山を初めて訪れたのが676年、そして再入国は遅くとも683年であって、周遊距離数は兎も角、ここでの「十餘年」の記とは矛盾する。後世、仏陀波利の功業を誇張すべく

加えられた一文と考えられる。

### 3.7 「仏頂尊勝陀羅尼經」を中国に将来する仏陀波利

至永淳二年迺至西京。具以上事聞奏大帝。大帝遂將其本入内。請日照三藏法師。及勅司寶寺典客令杜行顛等。共譯此經。勅施僧絹三十四。其經本禁在内不出。其僧悲泣奏曰。貧道捐軀委命遠取經來。情望普濟群生救拔苦難。不以財寶爲念。不以名利關懷。請選經本流行。庶望含靈同益。帝遂留翻得之經。還僧梵本。

仏陀波利は、『仏頂尊勝陀羅尼』の梵本を携えて、永淳二年（683年）に中国長安を再訪し、高宗（在位649～683年）に面会し、当経伝来の経緯を申し上げた。そうすると高宗は、仏陀波利に絹三十四を施与するかわりに、梵本を召し上げ、日照三蔵や杜行顛に翻訳させて、固く宮中に秘してしまったのである。

この事態に困惑した仏陀波利は、「命がけで当経を将来したのは、広く衆生を救済するため」であることを涙ながらに訴えて、ついに梵本は返還されたのである。

この文脈で問題なのは、仏陀波利が中国を再訪した年次である。この〔1〕志静序の記述は、地婆訶羅訳『仏頂最勝陀羅尼經』の経序（以下、彦惊序）の記録と全く矛盾するのである。彦惊序では、杜行顛訳を儀鳳四年（676年）、地婆訶羅訳を永淳元年（682年）と記すのみで、仏陀波利についての言及は皆無なのである。すなわち、仏陀波利による梵本の将来以前に、杜行顛・地婆訶羅はすでに別の梵本を入手していたことになるのである。

さらに、問題を難しくさせるのは、695年編『大周刊定衆経目録』（大正蔵No. 2153）において、地婆訶羅訳を永隆元年（680年）、仏陀波利訳を永淳二年（683年）と記す一方、杜行顛訳が未収録となっているのである。

この年次の矛盾について、当時の經典目録の編纂者あるいは注釈者は、大いに困惑したものと思われる。730年以降の資料には、以下のごとく、将来及び翻訳年次について、様々な会通や調整の跡が見受けられる。

#### ○智昇編〔2〕『開元釈教録』（730年編纂：大正蔵No. 2154）

彦惊序を重視して、杜行顛訳を儀鳳四年（676年）、地婆訶羅訳を永淳元年（682年）とする。〔1〕が記す仏陀波利訳の年次については、「不可依序定其年月」として、あえて仏陀波利の中国再訪、および翻訳年次の明記を避けている<sup>11)</sup>。この態度は、800年編、〔4〕円照録にも継承されている。

#### ○法崇撰〔5〕『仏頂尊勝陀羅尼經教跡義記』（800年頃：大正蔵No. 1803）

仏陀波利・杜行顛・地婆訶羅の三訳全てが永淳二年（683年）であるとする<sup>12)</sup>。これは、〔1〕志静序に則り、年次を調整したものと見られる。

#### ○慧琳撰『一切経音義』（807年編纂：大正蔵No. 2128）

仏陀波利・杜行顛の両訳を儀鳳四年（676年）、地婆訶羅訳を永淳元年（682年）とする<sup>13)</sup>。これは智昇の見方をより進めたものであり、仏陀波利による中国再訪の年次を早めたものといえる。

#### ○武徹記〔6〕『加句靈驗仏頂尊勝陀羅尼記』（823～年編纂：大正蔵No. 974C）

冒頭において「昔儀鳳年中（676～679年）。佛陀波利所傳之本」と述べる<sup>14)</sup>。

#### ○統法釈『仏頂尊勝陀羅尼經釈』（1700年撰述：卍統蔵経92所収）

杜行顛訳を調露元年（679年）、地婆訶羅訳を永淳元年（682年）、仏陀波利訳を光宅元年（684年）

とする<sup>15)</sup>。いずれの伝承とも異なる説であるが、その根拠は全く示されていない。

そして、仏陀波利の中国再訪年次の考証は、干瀉龍祥・那須政隆・藤枝晃・長部和雄先生等によってもなされてきた<sup>16)</sup>。干瀉先生および那須先生は、いずれも仏陀波利の中国再訪年次を儀鳳年間に改めて、会通を試みているが、結論的に『一切経音義』の編者慧琳と同類のものといえよう。すなわち、〔1〕志静序の話をベースにしながらも、年次の考証では彦惊序を重視したのである。

この会通は様々な矛盾を克服しており、一面説得力を持つものであるが、まだ重大な問題が残されている。すなわち、仏陀波利・杜行顛・地婆訶羅訳本を比較する時、その経文・陀羅尼において、同一の梵本に基づくとは思えない相違が見受けられるのである。

私はこれについて、経文・陀羅尼を比較する中で、当時の中国に複数の梵本が存在していた確証を得ることができた。杜行顛訳の陀羅尼中に見られる特異な文脈「mahāyāna-prabhā-kāya-viśuddhe……」が、Stein.4723、およびホータン語訳の断簡中<sup>17)</sup>に見受けられたのである<sup>18)</sup>。

この事実を考慮するならば、〔1〕志静序に説かれる「仏陀波利将来本に基づき杜行顛・地婆訶羅訳本が成立した」（同本異訳）との流れ自体が、疑わしくなってしまう。

現時点では、杜行顛・地婆訶羅による翻訳時、仏陀波利将来本が複数の梵本の一つとして用いられた可能性を想定しうるのみであって、両経序の内容を安易に会通し難い。

### 3.8 仏陀波利による仏頂尊勝陀羅尼経の漢訳

其僧得梵本將向西明寺。訪得善解梵語漢僧順貞。奏共翻譯。帝隨其請。僧遂對諸大徳共順貞翻譯訖。

仏陀波利は、返還された梵本を携えて西明寺に向かい、高宗の認可のもと、梵語に精通した中国僧順貞<sup>19)</sup>と共に翻訳したのである。この仏陀波利による翻訳の年次は、前述したように諸説紛々としているが、儀鳳四年（676年）、あるいは永淳二年（683年）となるであろうか。

その翻経場には、順貞のみならず、諸大徳が臨席したことが述べられている。資料〔4〕〔5〕では、具体的に大徳円測（613～696年生存）の関与を示唆している。円測は唐代法相宗の僧で、長安西明寺を拠点とした僧として有名である。この円測は、日照（地婆訶羅）が、『仏頂尊勝陀羅尼経』を翻訳した際にも、証義として参画しており興味深い<sup>20)</sup>。

### 3.9 仏陀波利の入五臺山

僧將梵本遂向五臺山。入山於今不出。

『仏頂尊勝陀羅尼経』の漢訳を終えた仏陀波利は、その梵本を携え、五臺山に入り消息を断ったという。話の筋を辿るならば、老人の弟子が先導となり、仏陀波利は文殊菩薩に親しく見えたことを暗示しているのである。さらに資料〔5〕では、明確に「是知大権方便文殊引接<sup>21)</sup>」とまで述べられている。

ここで興味深いことは、800年頃までの資料〔1〕〔2〕〔5〕では単に「五臺山」であるのに対して、後代の資料〔7〕〔8〕では、より限定的に、五臺山中の「金剛窟」に隠居したと述べられている。『入唐求法巡礼行記』第3巻、開成五年間中（840年）の記事においても、同様の記事が見受けられる<sup>22)</sup>。

この金剛窟とは如何なる場所であろうか。「金剛窟の場所」「金剛窟の内容」との二種の観点から整理すると下記の表のごとくなる<sup>23)</sup>。

	文献典拠	金剛窟の場所について
1	古清涼伝	王子焼身寺の東北（中臺と北臺の南，東臺の西，三山の中央）
2	広清涼伝	北臺の天井の下は，龍宮・龍池また金剛窟に通じる
3	〃 〃	東・北臺の二麓の下，楼観谷の内（南北嶺の間の石門が出入口）
4	巡礼行記	北臺東側の上米普通院より南に十八里の谷，その谷の東南三・四里，西谷に向かって一里ばかりのところ

	文献典拠	金剛窟の内容について
1	古清涼伝	文殊将来の三世諸仏供養の具を多く蔵する（その具は，楞伽山の羅刹鬼王がつくり，迦葉仏に奉獻供養した銀の箆篠。その樂具を，文殊菩薩は，銀紙金書の毘奈耶蔵・修多羅蔵とともに，清涼山金剛窟に将来したという）
2	〃 〃	僧祥雲の伝えによると，山の神の住処であるという
3	広清涼伝	文殊の大宅（繁峙県出身の仏慧師の伝聞によると，窟口より約三十里ばかり行くと横河があり，そこには宝林が茂り，光り輝く金楼と瓊塔があるという）
4	〃 〃	僧惠澄の伝聞によると，兜率天王の所造，あるいは拘楼秦仏の時に造られた寺の銅鐘を，山の神が持ち去り収めたという
5	〃 〃	無著の伝聞によると，金剛窟の東北方に金剛般若寺（化般若寺）があり，老人が住している <sup>24)</sup>
6	〃 〃	無著の伝聞によると（華嚴鈔の説），金剛窟は一万菩薩の却歸するところであり，その窟内では，大聖文殊師利菩薩が「華嚴経」を講じているという（無著は，老人をまねて金剛窟に入ろうとするも，その窟内は狭小で，両三步で立ち止まると説明される）
7	〃 〃	法照の伝聞によると，金剛窟には一百七十五間からなる金剛般若寺があり，大聖文殊が居ますという
8	入唐求法巡礼行記	窟内には多く西天の聖迹があるという
9	〃 〃	維衛仏の時に，香山摩利大仙が造った三千種七宝の樂器を，文殊が将来して窟中におく
10	〃 〃	拘留秦仏の時に，兜率天王が造った鐘を，文殊が将来して窟中におく
11	〃 〃	迦葉仏の時に，銀で造られた箆篠を，文殊が将来して窟中におく
12	〃 〃	星宿劫第二仏の全身宝塔一千三百級を文殊が将来して窟中におく
13	〃 〃	振旦国の銀紙金紙および百億四天下文字を文殊が窟中におく

以上の表をまとめると，金剛窟とは，文殊が様々な供養具等を秘蔵する場所であり，「華嚴経」を講ずる場所と理解することができる。

そして，「仏陀波利が金剛窟に入住した」との伝承と関連して，「仏陀波利は文殊の侍者眷属になった」との伝説が成立してくるのである。一例として，ここでは『広清涼伝』巻中所収「法照和尚入化竹林寺十六<sup>25)</sup>」を取り上げたい。

五臺山を訪れた僧法照（～777年）が，4月13日，50余僧とともに金剛窟を巡礼した折，文殊・普賢，

一万菩薩および仏陀波利による集会を目の当たりにしたという。さらに法照は、その夜分、仏陀波利の案内のもと、窟中の金剛般若寺に招かれ、大聖文殊を礼拝したと記すのである<sup>26)</sup>。仏陀波利は、梵僧のすがたで、身長は7尺であったという<sup>27)</sup>。ここでの仏陀波利は、一万菩薩あるいは善財・難陀両童子とともに、文殊の侍者として位置付けられており、聖と凡の仲介者という重要な役割を果たしているように読みとられる。

同話は、『仏祖統紀』第26巻、『宋高僧伝』第2巻および第21巻、『浄土往生伝』下巻、『往生集』第1巻など、多くの資料に記載されている<sup>28)</sup>。

そして、仏陀波利が文殊の侍者として解釈されていく中で、「五臺山文殊」という定型が生まれたのである。頼富本宏先生は、五臺山文殊について、「二尊、もしくは四尊の侍者を従えた集合尊としての文殊信仰」と定義づけている<sup>29)</sup>。このうち、四侍者のパターンでは、善財童子・優填王・最勝老人とともに仏陀波利三蔵が加えられているのである。この特殊な文殊の図像には、法照の話に象徴される「仏陀波利を文殊の眷属」とする解釈が色濃く反映されているといえよう。また『敦煌石窟<sup>30)</sup>』によれば、敦煌文書 Pelliot.4049 の白描図像には、文殊の傍らに合掌をした梵僧が描かれているという。

### 3.10 仏陀波利をめぐる後日譚

今前後所翻兩本並流行於代。其中小小語有不同者幸勿怪焉。至垂拱三年。定覺寺主僧志靜。因停在神都魏國東寺。親見日照三蔵。法師問其逗留一如上説。志靜遂就三蔵法師諮受神呪。法師於是口宣梵音。經二七日句句委授。具足梵音一無差失。仍更取舊翻梵本勘頭。所有脱錯悉皆改定。其呪初注云最後別翻者是也。其呪句稍異於杜令所翻者。其新呪改定不錯并注其音。訖後有學者幸詳此焉。至永昌元年八月。於大敬愛寺見西明寺上座澄法師。問其逗留亦如前説。其翻經僧順貞見在住西明寺。此經救拔幽顯最不可思議。恐有學者不知故。具録委曲以傳未悟

多くの資料は、仏陀波利の五臺山（金剛窟）入住をもって話を終らせるが、唯一、〔1〕のみ、直後の動向を記している。すなわち、経序の撰者志静（定覚寺主僧）の知る限りで、仏陀波利周辺の僧の談話、および消息が言及されているのである。

- ① 垂拱三年（687年）に神都（洛陽）魏国東寺において、志静は日照三蔵（地婆訶羅）に会い、前述のごとき仏陀波利の話聞いたという。そして志静は、日照三蔵について尊勝陀羅尼や経全体を、14日間をかけて詳しく教授される。その折、旧翻の梵本と校勘して、全ての錯誤を改定し、さらに陀羅尼の音を注し加えたという。それは、陀羅尼の初めに「最後別翻者是也」と注するものであり、その陀羅尼の語句は、杜行顛訳とはやや異なると、その特徴が述べられている。
- ② 永昌元年（689）八月、洛陽大敬愛寺において志静は、澄法師（西明寺上座）より、同様の仏陀波利の話聞いたという。
- ③ 仏陀波利の翻訳を助けた翻経僧の順貞は、澄法師と同じく、西明寺に在住しているという。

当箇所の記述には、数多くの問題が含まれている。まず冒頭の「兩本」という単語は、藤枝晃先生が指摘するように不可解なものである<sup>31)</sup>。兩本のうち一本は、仏陀波利訳で差し支えないが、もう一本をいず



れに定めるかが実に難しい。文脈からすれば、杜行顛と地婆訶羅の共訳本にあたると思われるが、これは宮廷内に秘されたのであり、広く流行したとは考えがたいのである。また、この共訳本は、現行の訳本の中、いずれに当たるのか詳らかではなく問題を複雑にしている。

この一本について、資料〔2〕〔7〕は杜行顛訳、そして資料〔5〕は日照三蔵（地婆訶羅）訳と解釈しているようである。しかし、敦煌写本や尊勝経幢を検しても、その大部分は仏陀波利訳であって、杜行顛訳・地婆訶羅訳が流行した形跡はほとんど見受けられない。

この「兩本」の具体的内容は依然不明であるが、むしろ文意は、仏陀波利訳の陀羅尼と異なる呪韻本があっても、義理は大同であることを強調したいのだと思う。仏陀波利訳が製せられた直後、すでに異本が登場し、様々な疑念が生じた状況が読みとられる。

次に問題なのは①の記事である。すなわち、志静が地婆訶羅の指導を受け、旧翻の梵本と校勘改訂した尊勝陀羅尼とは、何かという問題である。その特徴は、陀羅尼の初注に「最後別翻」とあり、その陀羅尼の語句は、杜行顛訳とはやや異なるという。

干瀉龍祥先生は、「最後別翻者是也」を有するものとして、高野山正智院所蔵の天平写経を挙げている。この写本は、現行の杜行顛訳と音写の字まで一致するが、それは地婆訶羅が、杜行顛訳を見ながら志静に授けたことに起因するという。最終的には、この改訂本について、現行の地婆訶羅第二訳『最勝仏頂陀羅尼浄除業障呪経』（大正蔵No. 970）と理解しているようである。

しかし、藤枝先生は、地婆訶羅が杜行顛訳本を参照したという干瀉説を批判し、校勘改訂した尊勝陀羅尼とは、音注の不完全な杜行顛原訳本であったと指摘している。この改訂された陀羅尼とは、高野山正智院所蔵の天平写経であり、現行の杜行顛訳『仏頂尊勝陀羅尼経』（大正蔵No. 968）に収録されたものだという。

当箇所の解釈は、先行研究において錯綜しており、議論の余地がある。例えば、〔1〕経序によれば、杜行顛原訳本は、宮廷内に秘されたのであって、藤枝先生が言うように、志静が校勘改訂することは至難と思われる。また、その改訂された陀羅尼が、現行の杜行顛訳に収録されたという説も、仏陀波利訳の経序という〔1〕の性格を考慮するならば違和感を覚えざるをえない<sup>32)</sup>。

『卍統蔵経』所収の統法釈『仏頂尊勝陀羅尼経釈』には、「即説呪曰此呪最後別翻」と説く仏陀波利訳が収録されている<sup>33)</sup>。筆者は、正智院所蔵の天平写経を未見であり断定はできないが、この箇所は素直に「仏陀波利原訳本を、地婆訶羅と志静が校勘改訂した」と読むべきでなかろうか。

## 結 語

仏陀波利の取経伝説は、経典目録や地誌等、多くの資料に収録されてきた。しかし、以上の整理からわかるように、その内容は一様ではなく、時代の経過とともに変容してきたのである。取り分け重要な変容を挙げれば、以下の二つであろう。

○仏陀波利が五臺山上で出会った老人が、後世、文殊の化身と解釈された（3.4）

○金剛窟入住と関連して、後世、仏陀波利もまた文殊の眷属として位置付けられた（3.9）。

五臺山には、国の内外を問わず、僧俗を問わず、様々な人々が文殊菩薩との面接を願って巡礼したので

ある。著名なところでは、インドから、菩提僊那（704～760年）や般若（734～810年）、また日本からも玄昉（?～746年）、靈仙（759?～827?年）、円仁（794～864年）、恵運（798～869年）、宗叡（809～884年）等が、この五臺山を巡礼したのである。アジア有数の聖地と称される所以である。

この五臺山と仏陀波利が、深く結び付くことによって、尊勝陀羅尼は幅広い信仰を確立していったものと考えられる。尊勝陀羅尼が、多くの言語に翻訳され、アジア一帯に流通したという事実を考える上で、五臺山の影響を考えざるをえないのである。

同時に仏陀波利・尊勝陀羅尼と結び付いたことにより、五臺山もまた多角的・重層的信仰を形成していったものと考えられる。『広清涼伝』冒頭において、仏陀波利は、無著とともに、五臺山の代表的巡礼者として位置付けられているのである<sup>34)</sup>。また、尊勝陀羅尼が経序とともに伝播される中で、五臺山信仰の底辺を拡大した側面も否定できない。

## 註

1) 筆者が現時点で把握している範囲では、敦煌から150部超の尊勝陀羅尼が見出されているが、仏陀波利訳は、そのうち8～9割を占めるようである。ただし、同じく「仏陀波利訳」とされながらも、内容的あるいは形式的に3種類ほどに大別することが可能かと思う。

\* S. = 大英博物館蔵 スタイン蒐集, P. = フランス国民図書館蔵 ペリオ蒐集,

Д x. Ф. = ソ連科学アカデミー東洋学研究所蔵, 北京 = 北京図書館蔵

### ① 仏陀波利訳 『仏頂尊勝陀羅尼経』

S.15,41\*,229,288,346,583,878,1095,1109,1191,1131,1201,1204,1383,1411,1704,1925,2004,227  
2,2392,2455,2483,2604,2625,2728,2786,2845,3369,3449,3465,3635,3757,4034,4616,4759,48  
26,4993,5185,5344,5496,5848,6091,6122,6709,6831,6930

P.0395V (\*tib),1071V-03 (\*tib),2103,2286V-03,2309,2411,2564V-01,2743,2890-03,3096,3920  
-04,3923,3296,4537,4662,5569\*

Дx.551,871,1170,2205,2249,3192B,3536,3508,4267,5421,6249,9906,10835, Ф.188

北京.7324,7325,7326,7327,7328,7329,7330,7331,7332,7333,7334,7335,7336,7337,7338,7339,7  
340,7341,7342,7343,7344,7345,7346,7347,7348,7349,7350,7351,7352,7353,7354,7355,7356,  
7357,7358,7359,7360,7361,7362,7363,7364,7365,7366,7367,7369,7370,8640

### ② 仏陀波利訳 『佛頂尊勝陀羅尼神呪』 S.4723

### ③ 仏陀波利訳 『佛頂尊勝加句靈驗陀羅尼』(附『佛頂尊勝加句靈驗陀羅尼啓請』)

S.2566,4378,5598 P.2197R,3919B

2) 「昔儀鳳年中。佛陀波利所傳之本。遍天下幡利。持誦有多矣。」(『大正藏經』第19卷386頁a段)

3) 嘉祐五年(1060)に撰述された郟濟川『広清涼伝序』に、延一(妙濟一公)によって『広清涼伝』全三巻が、三ヶ月をもって編纂されたことが述べられる。しかし実際に当伝を読むと、「元祐五年」(1090)、「紹聖五年」(1098)や「天会十一年」(1133)の年次が見受けられるのであり辻褄が合わない。当伝は、1060年に成立して以後も補筆増広されたものと考えられる。

4) 『大正藏經』第9巻590頁a段

実叉難陀訳『八十華嚴』(『大正藏經』第10巻241頁b段)にも類文あり。

5) 『大正藏經』第20巻798頁a段

- 6) 伝承によれば、ネパール盆地も中国五臺山の文殊によって開創されたのだという。この伝承がいつ頃成立したものなのか不明であるが、いずれにしろ五臺山の名が広くアジア一帯に伝播していたことの一証左になるものといえよう。
- 7) 唐代の規定では、一里は現在の 1000 メートルとされている。
- 8) 「向西南行七里許。到思陽嶺。昔儀鳳元年。西天梵僧。佛陀波利。來到此處。雨淚遙禮臺山」(『大日本仏教全書』第 113 卷 243 頁下段)
- 9) 「西國僧佛陀波利空手。來到山門。文殊現老人身。不許入山」(『大日本仏教全書』第 113 卷 237 頁下段)
- 10) 『敦煌石窟』第 10 卷 26～37 頁  
 莫高窟第 61 窟は、文殊堂と称されるように、文殊菩薩を本尊とする敦煌で唯一の窟である。当窟西壁には、五代の時代に(907～960年)に描写された、いわゆる「五臺山図」と呼ばれる壁画が存在している。この壁画中の南側には、「佛陀波利從罽賓國來尋臺峯／遂見文殊菩薩化老人身路問其由」、また北側には、「佛陀波利見文殊化老人身／問西國之梵」という傍題を有する二つの絵が描かれており、P.4049 の白描図との類似性が指摘されている。
- 11) 『大正蔵経』第 55 卷 565 頁 b 段
- 12) 『大正蔵経』第 32 卷 1014 頁 b～c 段
- 13) 『大正蔵経』第 54 卷 544 頁 a 段
- 14) 『大正蔵経』第 19 卷 386 頁 a 段
- 15) 『卍続蔵経』第 92 卷 73 頁上段
- 16) 干潟龍祥「佛頂尊勝陀羅尼經諸傳の研究」(『密教研究』68:1939年)  
 那須政隆「佛頂尊勝陀羅尼經の翻譯について」(『大正大学学報』38:1952年)  
 藤枝 晃「スタイン蒐集中の『佛頂尊勝陀羅尼』」(『神田博士還暦記念書誌学論集』:1957年)  
 長部和雄『唐代密教史雑考』27～36頁(神戸商科大学学術研究会:1971年)
- 17) 田久保周誉『敦煌出土 于闐語秘密經典集の研究』121頁
- 18) 拙論「尊勝陀羅尼成立考」237～243頁
- 19) 多くの資料は「順貞」とするのに対して、資料〔8〕のみ「順正」と記す。
- 20) 『大正蔵経』第 50 卷 727 頁 b 段
- 21) 『大正蔵経』第 39 卷 1014 頁 c 段
- 22) 「其僧却到西天。取經來到此山。文殊接引。同入此窟。波利纔入。窟門自合」(『大日本仏教全書』第 113 卷 238 頁上段)  
 また円仁は、『五臺山金剛窟収五功德記』一卷を将来品として挙げており興味深い(『大正蔵経』第 55 卷 1084 頁 a 段)。
- 23) 鎌田茂雄「清涼山記」攷一五台山における尊勝陀羅尼信仰(802～803頁)も参照した。
- 24) 「道義和尚入化金閣寺十五」では、金剛般若寺を金剛窟より東北の方向と説明するのに対して、「法照和尚入化竹林寺十六」では金剛窟内としている。  
 「遂引法照入金剛窟。忽見一院。黄金題榜云。金剛般若之寺」(『大正蔵経』第 51 卷 1115 頁 a 段)
- 25) 『大正蔵経』第 51 卷 1114 頁 a 段
- 26) 「十三日日中後。與五十餘僧。同往金剛窟巡禮。到無著見大聖處。虔心敬禮。三十五佛名。凡禮十餘遍。忽見其處。盡是琉璃七寶宮殿。文殊普賢。一萬菩薩。及佛陀波利。俱在一會」(『大正蔵経』第 51 卷

1115 頁 a 段)

- 27) 鎌田茂雄先生も指摘するところであるが、『入唐求法巡礼行記』第二巻によると、今はなき竹林寺般舟道場には、法照とともに、仏陀波利の御影が画かれていたという（『大日本仏教全書』第 113 巻 61 頁）。
- 28) それぞれの典拠については以下に示すとおりである。  
 『仏祖統紀』第 26 巻……『大正蔵経』第 49 巻 263 頁 c 段  
 『宋高僧伝』第 2 巻……『大正蔵経』第 50 巻 717 頁 c 段「唐五臺山仏陀波利伝」  
 第 21 巻……『大正蔵経』第 50 巻 844 頁 a 段「唐五臺山竹林寺法照伝」  
 『浄土往生伝』下巻……『大正蔵経』第 51 巻 121 頁 b 段  
 『往生集』第 1 巻……『大正蔵経』第 51 巻 130 頁 c 段
- 29) 頼富本宏前掲論文 363～366 頁。また実際の作例については、図録『慈覚大師 円仁とその名宝』48～51 頁等に収載されている。また最勝老人を、仏陀波利が出会った老人（文殊の化身）とする説もあるが、岩手県大長寿院のお札中では、「浄名居士」、すなわち維摩居士としており再考の余地がある（ベルナル・フランク著『「お札」にみる日本仏教』79 頁）。
- 30) 『敦煌石窟』第 10 巻、「莫高窟六十一窟」の項。
- 31) 藤枝晃前掲論文 405 頁
- 32) 藤枝晃前掲論文（418 頁）では、杜行顛訳が改訳された証拠として「後日照三藏奉詔詳譯。名佛頂最勝陀羅尼也」（『大正蔵経』第 55 巻 369 頁 a 段）の一文を挙げる。しかし、これは地婆訶羅訳『仏頂最勝陀羅尼経』（大正蔵No.969）の成立に関する記事であって、現行の杜行顛訳の陀羅尼が、改訂代用されたことを証明するものではない。
- 33) 『卍統蔵経』第 92 冊 75 頁上段
- 34) 「是以。波利西來畢命。願瞻於真相。無著南至捐軀。思接於慈顏。」（『大正蔵経』第 51 巻 1101 頁 a 段）

## 佐々木大樹氏 学位請求論文要旨（課程博士）

### 「仏頂尊勝陀羅尼の研究」

#### 【論文のねらい】

筆者は、初期密教において重要な位置にある仏頂尊について研究を重ねてきた。学位請求論文では、諸仏頂の中でも、広くアジア一帯で流行した「仏頂尊勝陀羅尼」（以下、尊勝陀羅尼）について論じた。具体的には梵蔵漢訳の資料を中心に、文献学・歴史学の両視点から、尊勝陀羅尼の成立・展開の諸相を整理した。

この尊勝陀羅尼は梵蔵漢訳のみならず、ホータン・クチャ・ソグド・パクバ・ウイグル・西夏語等、多様に翻訳されており、当時の仏教伝播の実態を知る上でも重要な位置にある文献といえよう。

#### 【論文の構成と要旨】

当論文は序論・本論・結論、および資料編より構成されている。その本論は全三章より成り、第1章が資料論、第2章が文献学的研究、第3章が歴史学的研究となっている。

##### ○第1章 資料論

第1節は、尊勝陀羅尼に関する資料について、「サンスクリット・梵字資料」「チベット訳資料」「漢訳資料」「敦煌資料」の順にその概要を提示した。敦煌より発見された諸写本の中には、『大正新脩大蔵経』に未収録の貴重な文献も含まれているため別項を設けることとした。

第2節では、尊勝陀羅尼に関する先行研究について整理し、筆者自身の見解を添えて当研究の現状と課題を明らかにした。

##### ○第2章 文献学的考察

当章では、尊勝陀羅尼系の経典・儀軌、あるいは陀羅尼自体について、梵蔵漢訳本の比較対照を試み、現存テキストの関係性について明らかにした。

第1節では、「仏頂尊勝陀羅尼経」12種類を対照して、経典を「初期型」「後期型」の2種類に大別した。初期型経典とは、仏が善住天子のために、尊勝陀羅尼を説くというものであり（7世紀後半漢訳）、後期型とは、無量寿如来が観自在菩薩に尊勝陀羅尼を委嘱する内容のものである（10世紀頃）。両経典の特色を論じた上で、初期型経典から後期型経典への展開に関して私見を述べた。

第2節では、いわゆる「尊勝儀軌」について論じた。第1項では、漢訳尊勝儀軌5種類の比較対照を行い、「別行法」「画像法」「壇法」等の個別の儀軌から、現行の漢訳儀軌が編纂された可能性を指摘した。第2項では、『Sādhanamālā』所収の梵蔵訳「仏頂尊勝母成就法」6種類について整理した。第3項では、以上の検討を踏まえ、経典の儀軌化の問題について言及した。

第3節では、蔵漢訳の尊勝陀羅尼29種類について、陀羅尼本文を47に区切り比較対照を行った。その結果、甲類（短型）・乙類（長型）、さらに両類中に第一種・第二種を設けて、数多い尊勝陀羅尼の類型化を試みた。この類型化によって、時代の経過とともに尊勝陀羅尼が如何に増広改変され、異本が成立したのか、その実態を明らかにした。

##### ○第3章 歴史学的考察

当章では、経典目録・経序等の資料26種類を中心に、特に尊勝陀羅尼の中国受容の問題について考察した。

第1節では、全4項を設けて、「五臺山」「仏陀波利」「不空」と尊勝陀羅尼の関係について整理した。

中国の尊勝陀羅尼信仰は、7世紀末、仏陀波利が尊勝陀羅尼の梵本を五臺山に将来したことに始まる。諸記録を見比べた時、後代、仏陀波利は、五臺山文殊の脇侍的性格を強めていったことが判明した。中国における尊勝陀羅尼の隆盛を考える上で、五臺山と仏陀波利の結び付きは看過できない問題といえよう。

第2節では、尊勝陀羅尼にまつわる中国資料の矛盾を指摘した上で、第2章における文献学的成果を交え、その史実の解明を試みた。第1項では、「仏陀波利将来梵本に基づき杜行顛・地婆訶羅が翻訳した」（同本異訳）という伝承について検証した。諸訳本を比較した結果、680年頃の中国において、すでに複数の尊勝陀羅尼梵本が存在した可能性が窺われた。そして、第2項および第3項では、伝善無畏・金剛智訳とされる尊勝陀羅尼について、「不空訳に基づく加句本」であるとの新説を提示した。

第3節では、全4項を設けて、中国全土で盛んに建立された「尊勝陀羅尼経幢」について論じた。具体的には、『石刻史料新編』所載の経幢214種類を抽出し、経幢に石刻された陀羅尼の種類、また経典・儀軌との対応について論じた。

#### ○資料編

最後には資料編として、以下の翻刻及び和訳を付した。

- ・『Uṣṇīṣavijayādhāraṇī』(東大写本No.363・457・474・1420・1645)
- ・『Sādhnamālā』(B.Bhattacharya No.191・211・212 / Toh No.3580・3601・3602)
- ・チベット訳尊勝陀羅尼経 (Toh No.594・595・596・597・598)
- ・敦煌写本 (大正蔵経未収録の漢訳9資料)